

# 特別なニーズのある子どもと体育分科会情報

## 基調提案

「目の前の子どもから出発する障害児体育」という題目で提案。これまでの障害児体育分科会の歴史を振り返り、国際的な子どもの権利条約を確認し、超異質集団での子どもたちを「つなぐ」教材、精神基地としての教師のあり様などを、過去の基調提案を元に説明されました。またそれぞれの実践を報告しながら、障害児分科会で大切にしてきた「ともに」について参加者で論議することができました。

この報告は、実践を交えた報告でした。中学部で大人不信、集団不信を持った子どもと出会い、授業に参加できない子どもたちをどうしたらいいのか、新たに教材を捉え直すことから始めます。子どもの生活や実態や課題を見て、遊びの視点から何が楽しめてわくわくできるか、どんな動きが心模様を引き出せるかなど、教師の願いや意図から「かくれんぼ鬼ごっこ」を行います。子どもたちが身体を動かすことのおもしろさ(隠れる、逃げる)を感じるとともに、子どもたちと一緒にルールを作っていく楽しさを味わい、気が付けば、「ともに」が難しい集団が、同じルールの元で「ともに」楽しんでいる実践でした。昨年までの障害児体育分科会での「3とも」についても確認しあい、「3とも」でみたときの教材の解釈や分析の大切さ、そしてそれが土台になることも共有できました。

## 実践報告

肢体不自由児学級の報告をされた先生の実践は、3人の子どもたちがキャスターボードに出会い、身体を動かす楽しさをわかっていく報告でした。キャスターボードでの鬼ごっこやマリオカートゲームはわくわくドキドキする場で、3人の笑い声と感情が交流される空間でした。先生が子どもにインタビューする実況風のやりとりにより、「何かをわかっていく」過程があり、「ともに」を楽しんでいた報告でした。

「ポンポンホッケー」の実践報告は、認識や運動能力に幅がある子どもたちみんなが学びあえる授業を目指し、ゲームの内容や道具を工夫して取り組まれた報告でした。一人ひとりの課題にも取り組みながら、クラス対抗にすることでゲームに参加していないときにも気持ちを向けるようになった成果も見られました。皆で「ともに」を探る教材として、それぞれのゲームを整理する必要性、高等部の難しさ、共同的なことをねらい競争的なことをしているのではないか、ともに楽しむ中身の精選等、次の実践に向けての課題も話し合うことができました。

